

【人物一覧表】

生野 康成（34）（41）（51）：会社員

生野 恵美（31）（48）：康成の妻

生野 美咲（6）（16）：康成の娘

恵美の父（74）：認知症

恵美の母（73）：恵美の父と暮らす

生野 陽太（1）：康成の息子

街の人：生野家の近くに住む住民

○ 生野家・康成の書齋

生野美咲（6）、ゴミ箱から写真を拾い上げる。大きな公園でのピクニック中の写真。生野康成（34）、レジャースhirtに座ったまま幼児（1）を高い高いする。生野恵美（31）、横で微笑む。幼児、性別不詳に写る。手には布製のボール。

康成 康成（41）（声）「（冷淡に）美咲」

美咲、写真を服の中に隠す。

部屋に近づく康成の足音。

康成 「（冷淡に）お父さんの部屋に入っちゃ

駄目だ。何度言ったら分かるんだ」

美咲、走り去る。

↳ 「十年後」

○ コンビニ前・ゴミ箱横（夕方）

生野美咲（16）、アイスを食べる。

ゴミ箱の中から音。

美咲、急いで食べ終え、ゴミ箱の中を探ろうとする。

○生野家・玄関

美咲、犬を抱えて帰る。

美咲「ただいま」

生野恵美（48）（声）「おかえり」

○同・浴室

美咲、犬の体を洗う。

恵美（声）「美咲、お母さん、エサ買ってく

るわね」

美咲「うん（少し間を置いて）この子、ヒナ

タつて名前にする。今日すごくいい天気  
で、太陽！つて感じの日だったから」

一瞬の沈黙。

恵美（声）「（冷静に）そう」

○同・ダイニング（夜）

生野康成（51）、恵美、美咲、食事

する。

ヒナタ、ピクニック中の写真に写って

いた布製のボールで遊ぶ。ボールの中

からカラカラと音が鳴る。

周りには、幼児用のおもちゃが散らば

る。

恵美「（ヒナタを見て微笑み）もうずっと押

し入れにしまったままだったおもちや。懐かしい」

美咲「（康成、下を向いて黙々と食べ続ける。美咲「（笑顔で）そのボールがお気に入りに

康成「（下を向いたまま冷淡に）勝手に拾ってきてもううちで飼うって言ったって駄目だろう。きちんとどこかに連絡した方がいい」

美咲「なんで。私は大切にします。だから、絶対私と一緒にいた方がいい。もう名前も決めたんだから。ヒナタ」

康成、瞬時に手を止め、恵美を見る。恵美、反応しない。康成「（感情的に憤って）どうしてそんな、

人間につけるみたいな名前なんだ。犬なんだからポチとかシロとか、そういう名前でもいいだろう。そんな名前は良くない」

美咲、動揺して言い返せない。

○ 同・同（夜）

康成、組んだ手をテーブルに置いて座り、斜め下をじっと見つめる。恵美、食器を片付ける。

康成「（冷淡に）あの名前は駄目だ」

恵美、反応しない。

康成、恵美を見る。

康成「（冷淡に）君は何も思わないのか」

恵美「私だって最初に聞いた時は動揺したわ

よ。でも、美咲がそう決めたんだから。

（少し考えて）なんだかちよつと嬉しい

じゃない」

○同・同（夜）

床には、ボールも含め、おもちやが散らばったままになっている。

康成、濡れた髪を拭く。

康成「（冷淡に）美咲は？」

恵美「寝たわよ」

康成、小さく溜め息をつく。

恵美「あなた、さつきひどくカッとなって

怒ったでしょ？ 美咲はあんな風に感情的

になるあなたのことなんて見たことないで

しょうに。それに、どうして怒られたのか

だってよく分からないでしょうから、相当

驚いたでしょうね。」

康成「：：」

康成、ボールを拾い上げ、見つめる。

康成「（冷淡に）あの犬は、今度の休みに動物愛護センターへ連れて行く。それくらい一緒にいれば美咲も懲りるだろう。（少し間を置いて静かに）家族にはならないんだから名前はいらない」

○同・同（朝）

美咲、ヒナタにエサを与える。

床には、おもちゃが散らばったまま。

美咲「なんで！？ 日曜日に連れて行くつ

て、もう今日金曜日だよ？ 金曜土曜と2

日しか一緒にいけないの？」

康成「（冷淡に）昨日も入れたら3日だ」

美咲、悔しそうな顔をする。

康成「それと、散らかしっぱなしのおも

ちゃ、しまうからな」

床には、転がったままの布製のボー

ル。

○同・リビング（夕方）

床にあったおもちゃは片付けられて無

くなっている。

ピクニック中の写真を手に持ち、見つ

める恵美。

恵美、ふと掛け時計を見る。16時直前。

恵美「あら、いけない」

恵美、写真を人目のつかないところにしまう。

○同・美咲の部屋（夜）

美咲、ベッド下から箱を取り出し、中からピクニック中の写真を出す。

美咲「（ヒナタに話しかけながら）この写

真、昔お父さんの部屋で見つけたの。私、こんなピクニックした記憶全くないんだけど。でもね、この時のお父さん、すごい優しいような顔してるでしょ？いつも怖い顔ばっかしてるけど、この写真見ると、こんな顔もできるんだって、思えるの」

美咲、微笑んで、ヒナタを撫でる。

○同・リビング（夕）

美咲、ヒナタとじゃれる。

恵美の電話が鳴る。

恵美、電話をとる。

恵美「もしもし、お母さん？」

○康成の職場・廊下

康成、スマホを見る。恵美から不在着信が3件。

康成「（電話をかけて）もしもし？ 悪い。会議だった」

○生野家・リビング

恵美と美咲、荷造りをする。

恵美「（早口で）お母さんから電話があったのよ、お父さんが倒れたって」

○康成の職場・廊下

康成「何！？ 大丈夫なのか」

○生野家・リビング

恵美「分からない。美咲と2人で行ってから、今夜はご飯、自分でどうにかしてくれる？」

○康成の職場・廊下

康成「ああ、分かった。気をつけてな」

○生野家・リビング



恵美 「うん」

美咲 「お母さん！ 電話変わって！」

恵美 「（康成に向かって）ちよつと待って」

美咲 「美咲、電話を受け取る。ヒナタにエサあげて」

○ 康成の職場・廊下

康成 「（目をつぶって）ああ、心配するな」

○ 病院・廊下

恵美の母と恵美、美咲、歩く。

恵美の母 「倒れた時はもう駄目かと思ったわ

よ」

恵美 「こつちだって慌てたわよ。お母さん

も、単なる貧血だって分かった時点で連絡  
してくれればよかったのに――。でも、大

事なくてホッとしたわ」

恵美の母 「『単なる』って言ったって、二週  
間くらいは入院みたいよ。大変よ」

○ 同・病室

恵美の父、ベッド上に座る。

恵美の母、外からドアを開ける。

恵美の母 「お父さん、恵美たちが来てくれま

したよ」

恵美「お父さん」

恵美の父「（恵美を見て）ああ、恵美。（美咲を見て）おお、陽太も来てくれたか」

美咲、固まる。

恵美「（大げさに笑って）もう、何言ってる

のよお父さん。美咲よ、美咲」

美咲、苦笑いする。

恵美の父「ああ、美咲か。陽太はどうした」

恵美「（より大げさに笑って）もうやだ、お

父さん。いないわよ」

恵美の父「（遠くを見て）いないのかあ、そ

うかあ」

○生野家・ダイニング（夜）

康成、ヒナタにエサを与える。

康成「（冷淡に）エサだ」

ヒナタ、近づかない。

康成「おい犬！（冷淡に）エサだ」

ヒナタ、動かない。

康成、大きく溜め息をつく。

康成「ヒナタ！（少し優しいトーンで）エ

サだ」

ヒナタ、食べる。

康成 「うまいか？」

ヒナタ、夢中で食べる。

康成 「そうか、うまいか。（少し笑って）よ  
かったな」

康成、ヒナタを撫でる。

ヒナタ、顔を上げる。

康成 「（覗き込んで）ヒナタか。（少し笑っ  
て）ヒナタ。（もつと笑って）ヒナタ」

ヒナタ 「ワン！」

康成、ハツとし、怖い顔になる。

康成 「（怒鳴って）そうだ！ お前は犬  
だ！ ただの犬だ！ 名前なんてないん  
だ！」

康成、ヒナタを庭に出す。

○恵美の実家・寢床（夜）

恵美と美咲、寢支度をする。

美咲、恵美の様子をうかがう。

恵美、気づかない。

美咲 「ねえ、お母さん」

恵美 「ん？」

美咲 「ひなたって……誰？」

恵美、目をそらす。手を動かす。  
美咲、恵美をじっと見る。

恵美「（手を止めて）あなたのお兄ちゃんよ。あなたが生まれる前に亡くなったわ」

恵美「太陽の『陽』に、『太い』で『ひなた』。美咲を見て）あの頃、お父さんは、仕事よりも何よりも、私たち家族との時間を大切にしてくれた。いつも笑ってくれた。休みの日は毎日のように3人で出かけたわ。（斜め上を見て）あの子が1歳のある日、おじいちゃんも一緒にピクニックに行ったの。お父さん、レジャーシートに座ったまま、あの子をこうやってして言ったの」

恵美、両腕を上げて高い高いのジェスチャーをする。

恵美「（微笑んで）『お前は、いつも家族のことを明るくしてくれる太陽みたいな子だ、陽太』って。あの子の後ろには太陽が輝いててね、お父さん、幸せそうな顔してた」

恵美、美咲を見る。

恵美「（もっと笑顔になって）おじいちゃん、夢中で写真撮ってたわよ」

恵美、涙目になり、下を向く。

恵美「（低いトーンで）でも、その次の日の朝、あの子を起こそうとしたら、すごい熱を出してた。急いで病院に行ったけど、あの子が目を覚ますことは、もうなかつた。：。：。（頷いて）その時にはもう、美咲がお腹の中にいてね。（笑顔で美咲を見て）お母さんは嬉しかったのよ。暗い気持ちの私たちのところに、また明るくしてくれる太陽みたいな子が来てくれるんだって。（遠くを見て）でも、お父さんには、もう少し、ただ辛い現実とだけ向き合う時間が必要だったのかもしれないわね」

恵美、涙を堪え、無理矢理笑って美咲を見る。

美咲、恵美に抱きつく。

美咲「（震える声で）お母さん、話してくれてありがとう」

恵美、美咲を抱きしめる。

○生野家・ダイニング（朝）

康成、ヒナタのエサを持って庭に出る。

康成「（冷淡に）おい、エサだぞ。（周りを見渡してヒナタを探しながら）おい」

○恵美の実家・ダイニング・食卓（朝）

恵美の母と恵美、美咲、朝食を食べ終える。

恵美の母、片付け始める。

恵美の母「せっかく来たんだから、少しゆっ

くりしてあげばいいのに」

恵美「うちにだって用事があるんだから。美

咲も明日は普通に学校だし」

恵美の母「そうね。急なことで康成くんにも

迷惑かけちゃったわね。大丈夫だった？」

恵美「（頷いて）食事は自分でやってくれて

るみたいだから」

恵美の母「よろしく言っておいてね」

恵美「うん。私たち、今日もう一回お父さん

のところに会いに行つて、それで帰るわ

ね」

恵美の母「ええ。よろしくね」

恵美の母、部屋から出る。

美咲の電話が鳴る。

美咲、スマホを見る。

美咲「（恵美を見て）お父さんからだ！」

美咲、電話に出る。

美咲「もしもし？」

康成（声）「（ゆっくり静かな声で）美咲、  
すまない。申し訳ない」

美咲「どうしたの？」

康成（声）「（なんとか声を出して）ヒナタ  
が……いなくなっってしまった」

美咲「えっ？」

○生野家周辺・住宅街（朝）

康成、周りを見渡しながら電話で話  
す。

康成「（切迫した声で）お父さんのせいだ。

昨日の夜、庭に出してしまっただ。すま  
ない。今探してるんだが。（震えた声で）  
ヒナタ……ヒナタ……」

○恵美の実家・ダイニング・食卓（朝）

美咲、固まる。

美咲「（我に返って）分かった。私も帰った  
らすぐ探すから」

美咲、ゆっくり電話を切る。  
恵美、心配そうに美咲を見つめる。

美咲「（下を向いて）ヒナタが……いなく  
なっちゃって……」

恵美「どうして！」

美咲「（心配そうに）お父さんが、夜から庭に出してたって」

恵美「そういうことなら、早く帰る支度しないかね。ほら、動きましょ」

美咲「美咲、動かない。

恵美「美咲？」

美咲「（泣きそうな声で）お父さん、声、震わせて言ってた。（少し間を置いて）ヒナタ：：ヒナタ：：って」

美咲「美咲、顔を上げて恵美を見る。

美咲「私が勝手に犬拾ってきて、勝手に名前付けて、お父さんにも、お母さんにも、辛い思いさせてたよね」

恵美「恵美、美咲に近づく。

恵美「いいのよ。美咲は何も悪いことしてないでしょ？事情も知らせてなかったのにな、お父さんがイライラした態度でごめんね」

美咲「（小声で）うん」

恵美「さ、動くわよ」

○住宅街・小さな公園

康成「康成、遊具を覗く。

康成「ヒナタ」



○同・生野家近くの家・玄関前

恵美「恵美、住人と話す。」

恵美「（ヒナタの特徴を説明して）今日どこかで見なかったかしら？」

○同・生野家近くの道

美咲「周りを見渡し、とぼとぼ歩く。」

○同・広めの公園・草むら（夕方）

康成「必死な顔で、屈んで草むらを探す。後ろに恵美と美咲が立つ。」

美咲「もう、しょうがないんじゃない？ も

う戻ってこないかも、うちの子じゃないん

だから」

康成「（はっと振り返り）何言ってるん

だ！」

恵美「まあそろそろ食事の支度しに帰らないと。（康成に向かって）あなたも、まとも

にお昼も食べてないんじゃないでしょう」

康成「無言で再び草むらの方に顔を向けて探す。」

康成「（草むらの方を向いたまま）もうすぐ暗くなつて、バラバラで行動するのも危な

くなる。先に帰って食事の支度をしててくれ……。ヒナタは、俺が連れて帰るから」  
恵美「どうであつても、食事の時間には帰つてきてよ」

康成、無反応で前に進む。  
美咲「お父さん……」

○生野家・キッチン（夕方）

恵美と美咲、食事の準備をする。

○住宅街・広めの公園・草むら（夕方）

日暮れが近づき、暗くなっている。  
康成、草むらを探る。ふと動きを止め、ひらめいたような顔をする。

○生野家・キッチン（夕方）

恵美と美咲、食事の準備をする。

玄関の扉が開いた音がする。

美咲「帰ってきた！」

恵美「（笑顔で）早いわね」

美咲「見つかったってこと？」

康成、真剣な顔でズカズカと家の中を歩く。

康成「まだだ。でも、もう見つかる。必ず、

すぐに見つかる」

康成、家の奥へ歩いて行く。しばらくして音が鳴る布製のボールを手にキツチンへ戻ってくる。そのまま必死な顔で玄関へ行き、家を出る。

恵美と美咲、目を合わせる。

○同・玄関前・家の外（夕方）

恵美と美咲、二人とも同じ方向の遠くを見る。

○住宅街・広めの公園・草むら（夜）

恵美と美咲、息を切らして公園に着く。

既に着いていた康成の背中が見える。

康成「（ボールを持った手を大きく振って）

ヒナター。ヒナター」

ヒナタ（声）「（公園の外の住宅街から）ワ  
ン！」

康成、瞬時に声の方向を見る。  
恵美と美咲、同じ方向を見る。

康成「（震えた声で）ヒナタ……」

ヒナタ、康成の方へ走ってくる。

康成、力が抜け、その場で膝をつく。

ヒナタ、康成のところに着き、ボールに飛びつく。康成、ボールを啜えたヒナタを抱きしめる。康成「（震えた声で）ごめんな。ヒナタ。ごめんな」美咲、震えながら康成たちに一步一步近づく。ガクンと膝を落とし、康成とヒナタを腕で包む。美咲「（震えた声で）ごめんなさい。お父さん：：ごめんなさい。ありがとう」康成、美咲に包まれていた腕を出し、美咲を包む。恵美、動かずに大粒の涙を流している。

○生野家・リビング（朝）

恵美と美咲、荷物を持ってソファに座る。ヒナタ、ボールで遊ぶ。首輪をつけている。

康成「リビングにやってきて」じゃあ行くこ  
うか」

美咲、ボールを荷物に入れる。

全員、玄関へ去る。  
リビングに残された写真立てには、康成と恵美、陽太のピクニックの写真。

○大きな公園・ピクニックの写真と同じ場所  
美咲、ボールを投げ、ヒナタがとつてくる。

康成と恵美、レジャーシートに座り、笑って見ている。

美咲「お父さん、投げて」

美咲、康成にボールをパスする。

康成、ボールを投げる。

ヒナタ、ボールをとつて、康成に駆け寄る。

康成、そのままヒナタを持ち上げる。

康成「笑顔で」よおし」

持ち上げられたヒナタの後ろには太陽

が輝いている。

恵美、目に涙を浮かべながら、笑顔で

康成を見つめる。

恵美（心の声）「ありがとう。ひなた」

ヒナタの首輪には“HINATA”の文

字。

美咲、動かずに笑顔で見つめる。

美咲の目には、17年前の写真と同じ構図に映る。